

ついのべのつどい

oaken

小さい頃、狐の嫁入りを眺めているとおばあちゃんから良く叱られていた。狐の参列者に気に入られると狐になって同道させられるというのだ。大人になった今でも狐の嫁入りがあると僕は見入ってしまう。ひょっとすると参列者の中におばあちゃんが居るのではないかと考えてしまうのだ。

見知らぬ土地の四つ辻で迷ってはいけない。四つ辻毎には、いけないものが潜んでいて、迷った者を必ず悪い方向へと導くのだ。一度目は大したことはない。せいぜい石に躓くくらいである。しかし、四度目は剣呑だ。自分と遭遇してしまい、いけないものと入れ替わりになってしまうのだ。

最新式の洗濯機を買った。騒音の少ない真夜中モードが付いている。いつものようにナイトのボタンを押そうとすると、そのボタンはウシミツドキと表示されていた。こんなボタンあったかな、と不思議に思いながら押してみると渦の中に洗濯物と一緒に男の生首がごろごろと転がりだした。

私の住んでいる安マンションの集合ポストはいつもチラシで溢れかえっていたが、私のポストにだけはチラシがたまることはなかった。ドアののぞき窓から見張っていると業者は私のポストのところで一瞬ビクついて動きを止め、飛ばして次のポストから入れ始めた。なにか見たのだろうか？

昔のある焼物師は鮮やかな赤を発色させることに腐心していたが叶わず、ついには気を病んでしまった。ある夜更けに焼物師は家人を惨殺し、娘の遺体と共に作品を焼き上げた。焼物は釉薬が燃え立つような素晴らしい赤であったという。その焼物は今でも全国の骨董市を巡っているらしい。

樹海をさまよっていた俺は手頃な枝に縄を括りつけ、ぶら下がった。そのとたんに縄は切れて俺は尻餅をついた。もう短くなって使えない。俺に生きろということなのかもしれないと考え、戻ろうとして振り返ると、この上もない笑顔の死神が立っていて、真新しい縄を俺に差し出していた。

僕が小さい頃、母の背中に負ぶさって暗い夜道を帰っていると、母は急に立ち止まって誰かと話をしだした。誰だか知りたかったが前が良く見えない。邪魔な頭だなと思った瞬間、突然に視界が開けて赤い噴水の向こうに鎌を持った女がケタケタ笑っている姿をやっと目にすることが出来た。

彼女とはもう別れたと運転席の彼は云う。もう心配無い、ケリは付いたなどと彼のおしゃべりが止まらない。うんざりした私は窓にもたれ掛かってため息をひとつ吐いた。すると冷たい窓に「わたしはきつところされる」という文字が浮かび上がった。私の背中で彼のおしゃべりが止まった。

ねえねえ、知ってる？ その人がどんな人だかは、その人に円を描いて貰ったら良く分かるんだってさ！
最初と最後がずれている人は浪費家、楕円形の人は浮気性、四角っぽい人は頑固者、時間をかけて丁寧な人は真面目だってさ。そして、真円を書ける人は人以外の何者かなんだってさ。

ある村では独身男が死ぬと仮嫁という竹と藁で作った人形と共に火葬していた。仮の夫婦として死出の旅路につかせるためだ。ある男が火を付けられそうになった時、棺から飛び出した。仮死状態だったのだ。家族の喜びはやがて凍り付いた。仮嫁の竹の手がしっかりと後ろ帯を掴んでいる。

遊び疲れた僕たちは神社の裏手で当たり付きアイス食べていた。二人ともハズレだった。コウちゃんはハ

ズレ棒を投げ捨て、バイバイと言って走り去った。お母さんには普段から、神社に物を捨てては駄目と言われていたので、拾い上げると棒は当たっていた。コウちゃんは、車にあたった。

その川は古くは逢魔川という名で呼ばれていた。夕暮れにはここで遊んではいけないらしい。そんな決まりも忘れて石を投げて遊んでいたら、描く放物線の途中から石がムクムク大きくなってきて、落ち武者の生首となって川に沈んでいった。川面に消える前、たしかにニヤリと笑っていた。

残酷絵という浮世絵のジャンルがある。ある残酷絵は縛られた女が男によって責めさいなまれ、最後は槍で串刺しになって息が絶えるところまでを、場面毎に数枚の絵として描いてある。あまりにも忌まわしいのでお寺に保管されているのだが、公開されていない。なぜか胃に穴があくのだ。

学校の昼休みに友達と階段の踊り場でたわいもないおしゃべりをしていたら突然に辺りの空気が変わり、ぼかんとした表情のまま、まるで底なし沼に沈むようにして壁の向こうに友達は消えていった。行方不明として世間では大騒ぎになったが、私はいまだにこの事実を誰にも話せずにいる。

生命線の短い人も書き足して長くすれば効果があるのだという。生命線の終端にナイフを突き立て、そのまま手首を通り、肘の裏側を通り、上腕を通り、肩を通り、首筋を通して――そうして出血多量で死亡した死体が見つかった。生きたかったのか、死にたかったのかよく分からないのだ。

コウちゃんは病気だったので、お薬入りの水筒を学校に持参していた。その液体は甘い匂いがしていた。ある日、コウちゃんは誤って液体をこぼしてしまった。すると、掛かった廊下がジクジク溶け出して穴が空いた。コウちゃんは何も言わず直ぐさま家に帰り、どこかに転校してしまった。

夜中の監視モニターに変なもの映った。赤いハイヒールだけが家具売場を歩き回っているのだ。警備員がその階を調べたが異常は無かった。モニターの録画を見てみたら、そんなものは映っていなかった。それにしても、なぜ赤いハイヒールだと解ったのだろうか？ モニターは白黒なのに。

友人の妹が自宅で殺された。犯人は未だに捕まっていない。葬儀の時、棺の中の顔を見ようとしたが、ご家族から、ご遠慮ください、と云われた。鼻と口が削ぎ落とされた無残な顔だから無理もない。しかし、誰からもそんな話を聞いたはずのない僕が、なぜそのことを知っているんだろう？

その神社にはミイラの手が安置されている。大昔に空から落ちてきた人のものだそうだ。満月の夜、僕はこっそり忍び込んだ。なにか幽かに旋律のようなものが箱の中から聞こえて来る。思い切って箱を開けると、月光に照らされた手は蠢いていた。帰りたくないと泣いているのだと僕は思った。

久しぶりに郷里の母から電話があった。私が小さいときから可愛がっていた人形のチィちゃんの処分を訊いてきたのだ。不思議な事にこの人形の後ろ姿しか私の記憶には残っていない。私は母に古いし使わないからもう捨てて良いよと言った。記憶の中の人形がぐるりとこちらを振り返った。

目覚めると家族全員が枕元にひざまづいて私の顔を真剣な眼差しで覗き込んでいた。どうしたの、と私は問いかけようとしたが口が動かなかった。それどころか金縛りに遭ったように全身がびくりともしない。

皆が押し黙っているなか、ようやく母が呟いた。「まるで生きてるみたいだねえ」

『ペットを探しています』と、通勤路の電柱に一月程前からチラシが貼ってある。連絡先の携帯番号と名前が書かれてあって、写真付きだ。ずっと子犬だと思っていたのだが、よくよく見てみると、顔は毛むくじやらの人間の顔のようだった。未だに貼ってあるので見つからないようだ。

『一つ目同好会、新入部員募集中！』と、書かれたチラシが、私の入学当初に高校の門柱に掲げられていた。乱雑にセロテープで止めてあって、今にも風で飛んでいきそうだ。しかし、同好会はどこにも存在しないらしい。あれから二年経った今でも、風に揺れるチラシを毎朝、横目で視る。

患者を開腹した途端に先生は舌打ちをし、またか、と小さく呟いた。手術は成功したが患者は一週間後に亡くなった。先生によると、患者の腹腔内をドクロ模様の蜘蛛が這い回っていれば、どんなに術後が良好でも必ずその患者は死亡するのだという。その蜘蛛は先生にしか見えないらしい。

廃村の古井戸に落ちて、もうどれくらい経つのだろうか。いくら待っても人の気配はしない。気が狂いそうになった俺は、一日毎に『一』と、井戸の壁に線を引いて精神のバランスを保つことにした。線の数が百を超えた頃、地獄の刑罰には必ずしも痛みを伴う訳ではないことを思い知った。

歩道の傍らの看板に『一日座禅体験』と書かれてあったので、竹林へと続く道に逸れて行った。簡単な説明を受け、目を瞑って座禅を組んでいると、隣の人が「女を殺した」と、延々壊れた機械のように呟いている。気になって目を開けた瞬間、背中を警策で打たれた。まわりは墓場だった。

僕たちは探検と称して暗渠の中をザブザブと突き進んでいた。先頭のヒロチンが、甲蟹そっくりの生き物を見つけた。ヒロチンはそれを持ち上げ、「甲蟹獲ったぞー」と叫んで僕に振り返った。甲蟹は足をワサワサさせていたが、よく見るとその間に口があり、その口は人間のものであった。

笑顔の絶えない幸せな村があった。呑口様という封印壺のおかげであった。村人は悲しみや苦しみを心に感じると、そのご神体に向かって「四苦八苦、喰らうてくだされ」と唱える。呑口様が壺に封じ込めると言う訳だ。近年、呑口様の壺にひび割れが見つかって大騒ぎになっているという。

ある地方の神社にはホク口のある珍しい鬼面が飾られてある。たいそう古いものらしく、表面はカサカサに乾燥している。しかしホク口だけは弾力があり、しかも年々大きくなっているのだという。ホク口を少し削り、調べて貰ったところ、それは人の癌細胞組織で、生きているのだそうだ。

悪夢を見た。目をくり抜かれた咎人らしき男が後ろ手に縛られ、なにかを僕に訴えかけようとしていた。しかし上下の唇を麻糸で縫い合わされていて、唸り声にしかならない。ついに唇が引き裂かれ、男が大口を開けた。そこで、目が覚めた。僕の後ろで声がした。「殺すって言ったんだよ」

最終電車を降りると、駅前の外灯に募金箱を抱えた少女が佇んでいるのが見えた。少女のまわりだけ、やけに暗い。こんな時間におかしい、と思った瞬間に首筋がちくりとした。よく見ると少女が抱えているのは、老女の生首であった。視線を合わせないようにして、私は足早に立ち去った。

座ると必ず死ぬと云う椅子があった。その椅子は丸くて真ん中に穴が空いていて四脚の一つはラーメン店の安椅子である。死因は様々であるが座った客は一週間以内に死んでしまう。その駅前のラーメン店の客層には馴染み客など無いので、店主も誰もその事実を知らないでいるのだ。

公園の木の下にオモチャのスコップで子供が小山を作っていた。小山には『ぴいちゃんのおはか』と幼い文字で書かれた棒が刺してあった。子供が言うには、ぴいちゃんはママが作ったお酒を飲んで死んでしまったという。その後、お風呂場で料理したあと、ここにママが埋めたのだそうだ。

通学路の横にある古びた洋館の庭は広い。その向こうの洋館の窓から、毎朝、赤い服の少女がぼくに微笑みかけてくれる。気になったぼくは、思い切って日曜日にその屋敷に忍び込んだ。窓の向こうの少女は只のポスターであった。しかし偶に手を振ってくれていたのはどういうことだろう？

ある河川敷でイベントが催された。数百の紐付き風船に、草花の種を添えて皆で飛ばすのだ。号令の元、風船は青空に吸い込まれていった。子供がアッと叫んだ。ある風船が、どうみても人の首にしか見えないのだ。人々がざわつく中、その風船はゆらゆらと西の方へと漂って消えていった。

雨上がりの夜空には大きな満月が浮かび、冷たい光を地上へと投げかけていた。アスファルトにはうっすらと水たまりが出来ていて、満月が映えている。背広の男がそこを通りかかった時、巨大な鬼の手が水たまりから現れ、男を引き摺り込んでいった。静寂に包まれた夜の出来事であった。

原因不明の頭痛が続いている。医者も解らないそうだ。お祓い屋に観て貰うと、誰かに呪いを掛けられていると云うことらしい。教えて貰った通り、庭を掘ってみると小箱の中に人形の呪物があった。部屋に持ち帰り、灰皿の上で呪い返しを行うと、隣の部屋から妻の叫び声があがった。

二月のある日、僕達は豆まきをして遊んでいた。そうしてふざけて遊んでいるうちに紙製の鬼面が破けてしまったので、神社に納めてある儀式の鬼面を使うことにした。僕達が豆をぶつけると鬼役の子がギャッと叫んで倒れてしまった。豆をぶつけられた箇所が溶けて穴が空いていたのだ。

雨が降りしきる中、外灯の下で女の子がうつむいて泣いていた。どうしたの、と訊きながら私はしゃがんだ。女の子は、歯茎を剥き出した猿のような大口を開けていて、そのくせ、幼子のようにか細い声をあげて泣いていた。私はその場から逃げ出した。今でも雨の日に見かけることがある。

河童伝説の滝を男と共に俺は訪れた。その男は地元の人で、親切にもこの場所まで案内してくれたのだ。ここから滝壺を覗くと吸い込まれそうだった。キュウリが好物だと云われているが、本当は人間の肉が好物なんですよねえと俺が呟くと、よく知ってる人間だ、と俺の背中で男が呟いた。

「会社辞めたい」と呟いた。「駄目だ」と返してくる女がいた。プロフィールには35歳。「会社辞めたい」毎日呟いた。「駄目だ」毎日返してきた。ある日呟いた「死にたいです」。次の日、何の前ぶれもなしに妻が上京してきた。1年ぶりの私に生命保険証をわたして言った。「ハンコ」

俺の町に殺人鬼が出没した。すでに犠牲者は五人目だ。犯人を許してはおけない。心配性の母が止めるのも聞かず、俺は自警団に加わり夜の町を見廻った。しかし六人目の犠牲者が出てしまった。落ち込んで帰宅した俺に母が言った。良かったわ今日も殺人鬼からあなたを守ることが出来て。

心配性の母は危ないから、と猛反対だったが、俺は警察官としてこの町を守っている。そんな中、俺の町に殺人鬼が現れ、犠牲者の数を増やしていった。今日も新たな犠牲者を出してしまって、落ち込んで帰宅した俺に母が言った。良かったわ、今日も殺人鬼からあなたを守ることが出来て。

夜中、公園の外周をジョギングしていると、小さな女の子が目についた。その幼子は着物を着ていて、毬をついて遊んでいるようだった。僕の動きに合わせてかのようにツーと移動している。砂場を越えて、滑り台を昇り、ジャングル・ジムを突き抜けたが、ついている毬は落とさなかった。

夜中、公園の外周をジョギングしていると、小さな男の子が後を付いてくる。プップー、と言いながら三輪車を漕いでいる。意地悪をして猛ダッシュをかけたが、それでも付いてくる。立ち止まって、「君、速いね」と言って振り返ると男の子の首は無かった。プップー、と男の子は言った。

最近、変な虫が湧いて困ると友人から電話が掛かってきた。なんでも、本棚の後ろやベッドの下など、至る処に居るのだそうだ。先日などは耳元で「お前は臭う」と囁かれたらしい。「おい、それって何一一」と言いかけて俺は固まった。「電話が長い」と、変な虫が怒っていたからである。

何十年も前の本に俺のことが書かれてあるんだよ！ 糾弾されてるんだよ！ 断罪だよ！ おかしいじゃないか！ なんて知ってるんだよ！ あれは俺しか知らないはず！ 俺だけの秘密のはず！ そう友人は絶叫し、一冊の本を残して教室を飛び出していった。梶井基次郎・桜の樹の下には

悪夢をみた。なぜか私は長い棒の突端でバランスを取っている。眼下は果てしなく深く、霞んで見えた。少しでも気が緩めば、墜落することは免れない。気を落ち着かせているうちに、やがて棒と一体化したような気がしてきた。これが悟りの境地か、と思ったとき、風鈴がチリンと鳴った。

ぼくの家で飼っている室内犬のジョンは困り者だ。家人の隙を見ては外へ飛び出し、パンプスやら、運動靴やら、をどこからともなく集めて来ては庭に隠しちゃう。ジョンは蒐集家だね、とみんなは笑っていたけど、ある日、中身のある長靴を持って帰って来て、そりゃもう家中、大騒ぎさ。

変なストーカーに付きまとわれて怖い思いをしている。初めて出会ったのは図書館だった。私の顔を見てニヤニヤしていた。それからは、電車の中や学校など、常に私の前に現れるようになったのだ。しかもある時は、机の引き出しの中にまでニヤニヤ顔があった。どうすればいいのだろうか？

老舗デパートのエレベーターは一階に向かって下降していた。乗り合わせた客は俺一人だった。突然エレベーター内が真っ暗になり、エレベーターガールが「地獄へと参ります」と低音で呟いた。扉に赤い目が反射している。ハッとした瞬間、一階で扉は開いていた。「またのご利用を……」

山間の峠を友人とハイキングしていたら、途中、突風が吹いて草葉が舞い踊り、顔が切れてしまった。こ

の一带は昔からカマイタチ伝説があるので、「やられたか？」と笑い合った。「あと一踏ん張りで峠越えだ」と、ハイタッチしようとしたが、出来なかった。お互いの腕が無かったのだ。

ある都市の郊外に鳥類剥製博物館がある。凝った造りの建物で、ケージの中だけでなく、天井から大きな鳥が吊り下げられていて、それは大空を自由に飛んでいるかのようであった。風の強い日には何故か羽ばたくことがあると、警備員の人から聞いた。亡骸となっても風が恋しいのだろう。

夜更けの歓楽街を俺は酔っ払って歩いていた。路地の前方を女がヨタヨタと歩いている。女が歩くたびに何故か『ギッ、ギッ』と何かが軋むような音がしている。声を掛けると『ギイー』と一際大きな音を立てて、女の首が180度回って俺を見つめ、そのまま路地の向こうへと消えていった。

困ったことになった、と友人から電話が入った。体中から毛玉が出て仕方ないと言うのだ。服では無いと言い張るので、いらついで電話を切ったが、それから一週間ほど連絡が無い。気になった俺がアパートを訪ねると、部屋中いっぱい毛玉に埋もれた、彼のミイラ化した遺体を発見した。

残業を終えての帰り道、急にお腹が痛くなったので公園の公衆便所に俺は駆け込んだ。トイレットペーパーを巻き取っていると、大きな文字が一文字ずつ書かれてあるのが目についた。『サ……イ……ゴ……マ……デ……ヨ……ム……ト……シ……ヌ』「読了」嬉しそうな女の声が聞こえた。

友人のA君とB君が学校の七不思議についてケンカしている。A君は、夜中になると目が光る、音楽室のバッハ像が一番怖いと主張している。B君は、夜中に踊り出す、理科室の人体模型が一番怖いと譲らない。僕は下らないケンカにウンザリして呟いた。君たちは去年死んでいる癖に……。

彼女とジグソーパズルで遊んでいた。彼女の写真を大きく引き伸ばして作って貰った特別製だ。ところが最後の一枚が無い。部屋中探してみたが、見当たらなかった。ふとみると彼女の頬にピースが引っ付いていた。それを取って無事パズルは完成したが、彼女はバラバラに崩れてしまった。

百物語の百話目を終えた時、なんらかの怪異が顕れるという。「さて、今宵の百物語が始まりましたー」と、進行役の挨拶から百物語が始まった。語り部達が話し終わると目の前の蠟燭が消えてゆき、百本目の蠟燭が今、消えた。「さて、今宵の百物語が始まりましたー」夜が明けない。

百物語の百話目を終えた時、なんらかの怪異が顕れるという。話は次々と進んでゆき、百話目に差し掛かった。話者は聴いたことのない音声で何かを呟いた後、煙のように掻き消えてしまった。これは幻覚だ、と皆に言い聞かせ、片付けをしていたら口ウソクが百一本あることに気がついた。

横断歩道にある交通安全坊やを指先で弾いたら、「イテッ」と睨み付けられた。驚いた私はその場から走って逃げた。交通警備員がいたので、今あったことを話すと「狸にでも化かされたのか？」と笑われた。話しているうちに気分も落ち着いたので、礼を言ってからよく見ると看板だった。

彼女は此処から飛び降りた。僕はあるマンションは十一階の非常階段に佇んでいた。彼女とは結婚を誓い合った仲であったが他の女性とも付き合っていたのだ。僕はその場に花束を供え、手を合わせて「許して

ください」と何度も心の中で呟いた。目を開けると花束は萎れて枯れ果てていた。

ねとらじをご存じだろうか？ 誰もがDJのように、ネット上にラジオを配信できるシステムである。ある時、放送リストに僕の住所が載っていたのでクリックすると、DJが、僕の恥ずかしい体験を延々と呟き続けていた。驚いた僕がPCのマイクの線を抜くと、ラジオの音声は沈黙した。

近所のヨボヨボの婆さんにガキ共が「歯外して」と言った。婆さんは入れ歯を外して笑った。ガキ共は喜んで今度は「目外して、耳外して」と注文がエスカレートしていった。合体ロボじゃないよ、と俺が苦笑していると、婆さんは次々と外して行って、最後は夕日の向こうに飛んでいった。

映画館で映画を観ていたら、自分だとしか思えないような人物が、スクリーンの四分の一の大きさに写っている。しかも、どう見てもデスマスクとしか見えないのである。館内がざわつき始めたので、こっそり扉から抜け出ると、ロビーでは色紙を持った人々に囲まれたので、走って逃げた。

映画館で映画を観ていたら、隣の席の女性が「もうすぐあの男は銃で殺される」などとネタバレしていた。注意しようと思っていると、女は続けて「次は前の席の男が心臓麻痺、そのとなりが脳溢血」というと、たしかにその席の人々が席から崩れ落ちた。「その次が……」女と目が合った。

夕暮れ時、境内に着物を着たおかつぱ頭の女の子がドクロを抱えて佇んでいる。夢のように私はそれを受け取って、泣きながら土に埋めるのであった。いつしか体の自由が戻ると女の子は消えていた。供養して欲しかったのだなと思うと、後ろから声がした。「前世であなたに殺されました」

僕は幼い頃、神社でコータ達と鬼ごっこをしていた。鬼のコータがいつまで経っても探しに来ない。コータはそのまま行方不明になった。そのコータが最近、賽銭箱の中でミイラ化した遺体で発見された。なぜ今になって、どうやってそこに入ったのか解らない。只、顔は鬼のそれであった。

CDラックに見覚えのないタイトルが並んでいた。『ある犯罪者の愉悦と後悔』とワープロ文字で書かれている。ケースを開けると、5cm程に切り揃えた髪の手束と幾つかの爪がパックされていた。驚いた僕がそれを放り出すと同時に女の悲鳴が沸き上がった。CD機がPLAYに成っていた。

近所の子供と神社でシャボン玉遊びをしていた。最後まで割れずに残った人が一番、ということで競争になった。ところが誰かが作ったシャボン玉がなかなか消えない。しかも何故か真っ赤だ。目で追っていると壁にぶつかってシャボン玉は割れたが、壁は血をぶちまけたかのように濡れた。

「はい、この理容店は今月で閉店です」「はい、もう開業してから50年経ちましたね。店も私も年を取りすぎました」「ただ、残念なのは身につけた技術が絶えてしまうことです」「首筋に刃をあてる時は緊張するものですが、私くらいに熟練すると目を瞑っても、ほらこのように」「あ」

母の日にカーネーションの鉢植えを配達して貰った。ところが私が配達して貰ったのと全く同じものが、また配達されてきた。贈り主の名前を見た母は叫び声をあげ、鉢を床に叩きつけた。散らばった土の中から小さな骨が数個こぼれていた。母に訳を訊いたが頑なに話そうとはしなかった。

僕が学生時分、友人の古い屋敷に泊まりに行った時、雨が降る庭の片隅に女が居るのを見た。子供を懸命に探しているのだと、なぜか僕には分かった。友人に知らせると「あれはいいんだよ」と困った顔をしたので、それ以上は聞けず仕舞いだった。今日は雨だ。まだ探しているのだろうか。

金髪美女がホログラムとして映るガラス玉を、おじいちゃんはとても大切に持っていた。そんなおじいちゃんも病気で亡くなった。遺品整理をしていると、ホログラム化されて鼻を伸ばしたおじいちゃんが、金髪美女の横にいるのをガラス玉の中に見つけた。僕はちょっと羨ましいと思った。

狭い橋の上で向こうから来た人を避けると、その人も移動した。左へ行くと左へ、右へ行くと右へ、と延々繰り返すのみで前に進めない。しかもニヤついて愉しんでいる風に見えたので、腹が立ってぶつかるつもりで前へ出ると、ぬるりとその人を突き抜けて、やっと前に進むことが出来た。

残業を終えての帰り道、後ろを付けてくる足音に俺は気がついた。止まってみても、歩みを速めてみても足音は後ろを付いてくる。何度か振り返ったが路地は薄暗くてよく分からない。横道に逸れると、素早く電柱の陰に身を潜めた。一足のゴム草履がペタペタと俺の横を通り過ぎていった。

テレビのスイッチを点けると、私が玄関の扉から部屋に入ってくるところが映し出されていた。二時間程前の出来事だ。テレビの中の私は、部屋に潜んでいた何者かによって首を絞められて苦しげであった。その時になって初めて自分が床から10cm程浮き上がっていることに気がついた。

マンションの屋上を見上げると女がフェンスに掴まって立っている。うんざりした気分していると、やっぱり女は飛び降りて死んだ。住民が駆けつけ、騒然となった現場を俺は後にした。とても嫌な気分だ。今日も先客がいた。俺の守護霊は、本当に婉曲な護り方をするものだと、心底呆れた。

政府筋から男の調査を依頼されている。男は、なぜか普段着が必ず黒色であり、体の動きがどこことなくおかしい。ある日、男は酔っ払いのような動きで海浜地区へと出掛け、空地に捨てられた洋式便所にまたがるとレバーを引き下げ、二つ折りになりながら便器の中へと吸い込まれていった。

アイドルの男の子のことを楽しく話しながら友達と並んで学校から帰っていると急に冷たい風が二人の間を通りすぎた。突然、友達は老婆のような声になり、よく分からない数式や数をもものすごい速さで声に出して言い始めた。すぐに元には戻ったが、怖くて今起こったことは訊けなかった。

妻がネクタイをプレゼントしてくれた。舶来物よ、と妻は微笑む。さっそくネクタイを着けてみたが、どうもしっくり来ない。何度やってみても、どこまでも締まるような感じがして、気持ちが悪い。苛立ったので思い切り引っ張ると僕の首がボトリと落ちてしまった。さすが舶来物は違う。

マンションの一室でボーッとしていたら、突然、左の壁から白い握り拳が現れて空中を漂い、部屋の中心で止まった。今度は右の壁からピースサインの手が現れて握り拳の前に止まった。ピースサインは床へと消えてゆき、握り拳は天井へと消えていった。よく分からない真夏の夜の出来事。

悪夢をみた。僕は夢の中で目覚めたが体は動かない。目だけを動かすと一匹の巨大なナメクジが手首を這っているのが見えた。その軌跡に沿って肉がこそげ落ち、真っ白な骨がむきだしだ。痛みは無く、血も流れなかった。ふと、地平線の向こうから押し寄せてくる大群を目の端に気づいた。

居間でドラマを見ていたら母が包みを持って来て、私から母宛への荷物が届いたと言う。私はそんな覚えは無いので適当な返事をしてTVを観た。しばらくして、後ろを振り向くと母は開けた木箱を眺めて呆然としていた。私が訊いても何も応えてくれず、箱の中身も見せてはくれなかった。

オバサンの庭にはたくさんの鉢植えのチューリップが咲いている。近所でも評判だ。だが、オバサンはあるひとつの鉢に向かって毎日呪詛のように恨み言を呟いているのを僕は知っている。そのチューリップはいつか枯れるだろうなと思っていたが、他の鉢よりも元気だ。なんだか嫌なのだ。

ある時、横断歩道の信号機の枠が二つでは無く、三つに増えていた。赤・青・黒、と並んでいる。今、黒が点灯していて車も停止している。渡ろうとしたが、嫌な予感がして逡巡しているうちに信号が赤に変わった。後ろから「助かったな」と言う声があったので振り返ったが誰もいなかった。

タバコの煙で輪っかを作っていたら、何故か妖精とゴブリンが輪っかの上で戦いだした。妖精が負けそうなので軽く息を吹きかけて体勢を崩してやったら辛うじて妖精が勝った。妖精はゴブリンの首を引きちぎり、貪りだした。あっと声をあげた拍子に息が煙と共に皆を掻き消してしまった。

父が亡くなり、先祖伝来の小箱を譲り受けた。それは本家の長子のみを受け継がれ、決して開けてはならぬと伝えられていた。夜寝ていると小箱の鍵穴から黒い髪のようなものが這い出て、渦を巻きだした。驚いて灰皿を投げつけてると小箱にあたってしまった。割れた小箱の中を見ると――

学校の音楽教室の机に「●●君大好き」とアイドルの名前の落書きがあった。気まぐれに「私も好き」と書いた。それから掲示板のように見知らぬ子とのやり取りが始まった。ウザクなったので「嘘だよバカ」と書いたら、次の日、教室中にビッシリ「死ね」という文字が落書きされていた。

真夜中のテレビに、突然、相撲中継が割り込んだ。力士は相手の胴に両手を廻して締め上げている。やがてバキボキと嫌な音がして口からは血が流れ始めた。それでも行司はノコッタノコッタとしか云わない。倒れた力士を診た医者が頭を振ったところでようやく行司が勝ち名乗りを上げた。

私の桜を探してください、そう云って貴女は逝った。一筋の涙が閉じた目からハラリと零れている。桜が満開となり、貴女の桜を探して歩き廻ったが見つからない。葉桜となった頃、やっと葉陰に見つけた一輪が涙のように散った。腹の底から突き上げて、うららかな春の日に私は慟哭した。

山道を歩いていたら岩場で石に挟まれている白蛇を発見した。白蛇は神の使いだとも云われているので、石をどけて助けてやった。その晩、寝ていると枕元に白蛇が現れ、昼間のお礼がしたいと言う。しかも最上級のものだそうだ。神と一体に――そう聞いた時、全身を生暖かい物が包んだ。

男は鬼と囲碁勝負をしていた。負ければ喰われてしまう。劣勢になった時、男は碁に強い住職の話の思い

出した。基石と一体となれば負けることは無いらしい。男は邪念を捨て、勝つことも負けることも忘れ去り、意識を盤上に漂わせた。人の形に積み重なった基石が一瞬のうちに、崩れた。

靈感があると噂されている先輩と私は夜道を歩いていた。先輩は何やらぼそぼそ呟き、取り出した飴を一舐めしてからプツと吹き出した。飴は路地を転がり、溝に落ちる前にフツと消えた。先輩によると餓鬼が集まって来ていたらしい。いる？ と新しい飴を差し出されたが私は頭を振った。

教室で授業中、前の席のT君が居眠りをしていた。よく見るとT君の頭の上に小人いて、身振り手振りで何かを僕に伝えようとしていた。しかしT君がふいに目覚めると同時にそいつは消えてしまった。見たことのない文字を黒板に書いていた先生は小首を傾げながらそれを消してしまった。

電車で揺られて居眠りをしていたが、衝撃音に目が覚めた。周りを見渡したが変わった様子は無かった。ただ窓の外の景色からは一切の色彩が失われている。否、というよりも一枚絵のように景色が変わらない。時計の針は止まったままだ。前の男の腕がずると落ちた。鼓動が聞こえない。

押し入れを開けると何故か女の子が正座をしている。驚いて閉めたが、見間違いだろうと思い、また開けると女性が正座をしていた。また閉めて呼吸を整え、ゆっくり開けると婆さんが正座をしていた。すぐに閉めて、しばらく考え込んでいたら中から腐敗臭が漂ってきた。開けるのが怖い。

公園のベンチで電線のスズメを眺めながら休憩していると、いつのまにか隣に初老の男が座っているのに気づいた。男がボソリと「右のスズメ」と呟くと、そのスズメは石のように地面へと落ちた。驚いて隣を見たが男は煙のように消えていた。後ろから「前のスズメ」と言う声が聞こえた。

五百羅漢の石仏を觀に友人と山寺に訪れた。石仏群――その中には必ず自分と似た物があるのだという。ある石仏の前で足が止まった。自分とそっくりの石仏が血塗れであった。別の方を觀ていた友人と僕とが同時にアツと声をあげた。どちらから言うともなく予定は全てキャンセルにした。

熱い日差しの日、木陰のベンチでウトウトとしていると、どこか遠くの方から物騒な声が聞こえてきた。「へっへー、もう逃げられないよ。生きたまま喰ってやろうねえー」「いやー、お願い。見逃してえー」ハツと目覚めてあたりを見回した。頭上の樹の蜘蛛の巣に蝶の片羽が揺れていた。

砂漠をさ迷ってからもう十日になる。水も食料もとっくに尽きた。荷物はどこかで落としたのだろうが、記憶にない。もう限界だ。俺は砂の上に倒れた。薄れゆく意識の中で、届けと願いながら妻に宛てたメッセージを砂に書いた。一陣の風が大地を書き換え、男の遺体に一服の涼を与えた。

夫の消息が砂漠で絶えてから一年程経ったある日、遺体が発見されたという一報が入ってきた。現地では火葬にされた夫の遺骨と対面した。関係者が一枚の現場写真を私に手渡した。写真には乾ききった遺体が写っていて、その指先には「あいしてる」の文字が風にも負けず砂に残っていた。

三日月の夜、橋の欄干に座る一匹の小鬼が男に襲いかかった。しかし男が印を結ぶと、巨大な拳によって小鬼は打ち返された。小鬼は額を地面に擦りつけて謝った。それから欄干に移ると月に手を掛けて、まる

で瞼をこじ開けるようにグイと月を満月へと広げ、月の向こうへと帰って行った。

河川敷の野球場で大きなフライがあがった。ピッチャーが声を掛けながらグラブを構えたが、なかなかボールが落ちてこない。外野の連中もピッチャーの周りに集まって来たが、その時になってもボールは落ちてこなかった。誰かが冗談で地面に震動を与えるとボールがポトリと落ちてきた。

友達と河川敷で遊んでいた時、頭から血を流している死体を僕は草むらに発見した。友達を連れて現場に戻ると死体は消えていた。友達をあきれ果てて僕を置いてみんな帰って行った。口惜しくて石を思いっきり投げつけると草むらから悲鳴があがった。草むらには――やっぱり、あったよ！

友人は夜毎の悪夢に悩まされていた。刃物によって傷つけられて出血多量で死んでしまう夢なのだそうだ。友人はノイローゼになり、剃刀から爪切りまで、刃物の類を捨て去り、部屋に閉じ籠もってしまった。その友人が遺体となって発見された。伸びた爪が頸動脈を切ってしまったらしい。

製品開発に携わるTさんは、いつも枕元に紙と鉛筆を置いている。就寝中でもアイデアが浮かぶと起きるので、忘れないうちに書き留めておけるように工夫したのである。しかしある時からこの習慣を止めにした。書いた憶えのない殺人計画が、びっしり細かく書き込まれていたからである。

山道で見つけた肌色の蟻をA君は手で潰した。途端に強烈な悪臭が体に付いて、石けんでも落ちなかったという。まわりを気にしたA君はそれから家に閉じ籠もってしまった。数日後、出血多量で亡くなったA君の遺体が風呂場で発見された。そこにはカンナやおろし金が落ちていたという。

近所のオバサンは玄関に入る前には必ずバレリーナのように時計回りに回ってから入るのが常だった。理由は分からないが、オバサンの表情はとてものにこやかものだった。ある時いつもと違って鬼の形相で反対回りであった。その日の夜、火事で家が全焼してオバサンの一家は全員焼死した。

遠い昔に別れた彼からの手紙を、なぜだか急に読みたくなった。苦労して押し入れの奥から箱を取り出した。文面を目で追っているうちに懐かしい想いで一杯になり、彼に逢いたくなった。その時、手紙の文字がさっと流れ落ちて手紙は真っ白になった。そういうことなのか、と私は悟った。

向こうから子供が駆けてきて私の傍らを過ぎてゆく。どこかで見たような気もするが良く思い出せない。その後ろから来た女性も通り過ぎてゆくが、これもうまく思い出せない。その次に現れた骸骨がお前はもう二人とは会えないと教えてくれた。その時になって始めて二人の正体が判った。

公園のベンチに座っていると野良猫がすり寄ってきて、小気味よい動きで足の上に居座った。「今日は肌寒いものな」猫を撫でながら呟くと「猫にはつらいよ」と猫が返した。そうして猫との会話を愉しんでいると、通りかかった人が「首がっ」と叫んだ。見ると確かに猫の首はなかった。

範馬刃牙という漫画に、力を込めると背中中の筋肉が鬼の顔に成る者が登場する。宴会芸のため、友人達は華奢な四人を集め、一人ずつ背中を見せて「鬼の顔」と叫ばせて大いにうけていた。しかし四人目のD君が叫んだとき、宴会場が凍り付いた。血塗れの女の顔がそこに顕れたからである。

蒼い夜に満月が柔らかく浮かんで湖面を照らしている。映える月がまるで舞台のようである。そこに異国の衣装を纏った女が笛を吹いていた。聴いたことのない旋律である。この世のものではないから当然だ。女の顔を見てやろうと湖を廻った。そうして私は現世に戻れなくなってしまった。

「忘れないで」病床の妻は黒髪を抜いて私の薬指に結んだ。そしてそれきり息をしなくなった。そのあとの哀しみと混乱の中で、黒髪はどこかに消えてしまった。あれから五年、再婚することになり墓前で手を合わせた。ふと手を広げると一本の白髪がそこにあった。人の想いも年を経るのだ。

風の気持ちよい午後、快調に自転車を飛ばしていると後輪がじんわりと重くなった。行き過ぎる人々がこちらを指さして何かを叫んでいる。後ろからハアハアと獣のような声が聞こえ始める。振り向くと良くないことが起こるような気がする。止まると良くないことが起きるような気がする。

十二年にもなる老猫を飼っている。今まで一度も外に出ようとしなかったのに最近では隙を狙って外に出るようになった。餌も食べなくなった。毛玉でも溜まっているのかと考え、猫草を与えたところ得体の知れない物を吐きだした。人の爪らしきものが見えたのは気のせいだっただろうか。

神社の境内では猫の集会在頻繁に行われている。それをウォッチするのが私の趣味だ。家の婆さんは明日、ある日の猫達はそんなことを語り合っていた。すると本当に近所のYさんが亡くなった。怖くなって見るのを止めてしまったある日、「聞こえてますよね」と飼い猫に問いかけられた。

君が亡くなってから僕は雨戸も閉めて部屋に閉じ籠もった。することといえば生前の君がしていたようにガラス製の花瓶の水を入れ替えることぐらいだ。主のなくなった花瓶に花は無い。ある日呼ばれたような気がして雨戸を細めに開けた。満月の光が花瓶に収斂して壁に君の像を結んだ。

薄暗い通勤路を曲がると跳ねているボールが目映った。その軌跡から考えると誰かが壁にボールをぶつけたような動きであったが、その人物は見当たらない。人が隠れる場所も無い。訝しみながら通り過ぎると、真後ろで、ボールをグローブでキャッチする時のパシッという音が聞こえた。

黄昏時、川沿いの土手を歩いていると風が止み、鳥が空に止まった。橋の向こうから男がやって来た。顔がぼやけて誰だかは判らない。男は寂しいのだ。なぜだか僕には判った。男からは嫌な臭いがする。僕が顔をしかめると男はやはり寂しげに消え去った。ふたたび風が動き、鳥が啼いた。

私は帰ってきた。遠い航海を終えて私は帰ってきた。体はもうボロボロだ。暗闇の果てで導く声も途絶え、たったひとりで不安だったけれども、ずっと声は聞こえていた。その声なき声に応えるため私は帰ってきた。最後に私は燃え尽きて光となるが満足だ。私は地球に帰って来れたのだから

私は階段を全力で下っている。すぐ後ろに得体の知れない物の息づかいが聞こえる。少しでも気を抜けば追いつかれてしまう。足がもつれそうになる。そうなってはもうお終いだ。階段は果てしなく長い。いや、永い。一体いつからだろう。何から追われているのだろう。どうすれば助かる？

繁華街で高校当時につき合っていた彼を見かけた。彼の歩き方は少し飛び跳ねるような癖があって、こんな雑踏の中でも目立っている。彼に近づこうとしたが、人に押されてうまく行かない。思い切って名前を呼ぶと、懐かしい歩き方でビルの間の空に消えていった。命日だとあとで知った。

セイタカアワダチ草に囲まれた一軒の廃屋がここにある。窓ガラスも割れて荒れ放題だ。ポケットの古新聞には十数年前、一家が惨殺されて一人息子が行方知れずと書かれてあった。犯人は捕まってない。扉を開けると木の腐った臭いが鼻をつく。とても懐かしい。「タダイマ」「オカエリ」

風が怖い、と彼女は言った。だから僕は上着を被せてあげた。嫌な風は聞こえないから僕の後ろを歩けばいいよ。ほら、月があんなに照っている。そうして僕たちはずっと歩いたけど、あまりに長い時間が経ったから、彼女が後ろを歩いているのかどうか、振り向くのが怖くなってしまった。

昼下がりの車両に人はまばらだった。花を手にした対面の少女は微動だにしない。何処かで会った気もするが、良く思い出せない。窓の景色は流れてゆく。少女はすっと立ち上がり、音もなくドアに歩み寄ると、そのまま吸い込まれるようにして外に出た。流れゆく景色に少女は乗った。

「暑いですねえ」生け垣の向こうのオバサンは庭を掃きながらも通行人に挨拶はかかさない。僕が見る限り一日中、庭掃除をしているみたいだ。蚊が多いのか、蚊取り線香を三つも焚いている。しばらくしてオバサンは警察に連れて行かれた。庭を掘り起こすと、旦那さんの遺体が出てきた。

合同練習も一通り終えて、僕はひとり居残って黙々とボールを蹴り上げる。イメージ通りのシュートが決まらない。そう、あの日のような。へたくそな癖に練習嫌いな僕が蹴ったボールは綺麗な放物線を描いてゴールに吸い込まれた。偶然だ。でも確かに僕の中で小さな革命は起こったんだ。

嵐の夜は首吊り死体が似つかわしいね。窓の外、良い枝振りの榆の木に、ほら。今度稲光が光ったら注意して見てごらん。彼の表情がよく見えるよ。枝葉が吹き飛ばすほどの暴風なのに、あまり揺れていないね。彼自身の重さで抗っているんだね。死体としての存在を自己主張しているんだね。

僕の通学路に空き地がある。不幸があって家を取り壊されてから、ずっと更地のままの状態だった。そこに女が立っている。伸び放題に伸びた雑草の陰から、下校時の僕を雨の日も、雪の日も、毎日見つめているのだ。僕ならもう大丈夫、と言うと始めて安心したような顔をして女は消えた。

月明かりが窓に影絵芝居を映し出していた。頭が並んでいる。罪人を後ろ手に括って土に埋めたのだ。端から立派な馬に跨がった官吏がやって来て、蹄で頭を潰して廻った。厭な音を立てて血しぶきが舞い上がる。七人潰し終わると同時に影絵は消え去ったが、血痕は窓に付いたままだった。

庵を訪ねて竹林を歩む。さくさくと枯葉を踏みしめる。吹き抜ける風がひんやりと湿り気を帯び始めた頃、苔むした岩場の向こうに女が佇んでいるのが見えた。二百年待っておりましたと女が云う。赤黒い百足が腹を見せて死んでいる。気づかれぬように後退ったが髑髏に嗤われてしまった。

三歳になる甥っ子が衛生ボ一口を食べている。座卓の前で、いっちょまえにきちんと正座していやがる。

欲張って10粒程度握っても5粒程しか手に残らない。口いっぱい広げて押し込んでみても3粒こぼれてしまって結局食べられたのは2粒だ。まあ、人生もだいたいそんな感じなんだよ。

小川沿いにあるベンチに腰掛けていると初老の男が少し離れて座り、手作り風のサンドイッチを食べ始めた。私と目が合った男は「まずい」と言いながら食べさしを川に投げ込んだ。鯉が群がっている。「餌みたいなもんだけど食べなきゃ死ぬからね」と言って笑った口には前歯は無かった。

線香花火は丸い種火となって光の軌跡を迸らせている。まるで生きているみたいだね、と妻は微笑む。その言葉で動揺した私の手が震え、種火が手から離れた。とっさに妻が手で受け止めてしまい、ヤケドを負ってしまった。妻は泣いている。生きていれば、今日はあの子の五歳の誕生日だ。

縁台の彼女はアサガオ模様の浴衣を着ている。こっちのがちょっと大きいと、鉢植えの大輪と見比べては戯けて裾をヒラヒラ揺らせた。轟音を伴って開いた打ち上げ花火の閃光が白いふくらはぎに映える。ふと、青いアサガオを引きちぎって、彼女の内股になすりつけてやりたい気になった。

太古の昔、人は陸上を歩くように水上をも歩くことが出来た。ある男が水上を歩けるのは変だな、と思った途端に歩けなくなり溺死した。死の際の強烈な意識が全人類に伝播し、人は水上を歩けなくなった。ところで、僕はさっきから人が息をするのは変だなと思い始めて息苦しいんだけど。

彼が帰省していると、友達から聞いた。彼とは高校生の時分に交際していたが、卒業と同時に彼は東京に行き、何となく自然消滅になったのだった。連絡は無かったので、彼が想う『地元』に、もう私は含まれていないのだろう。ここの田舎は良かったでしょ？ 帰る列車に微笑んだ。

気がつくとも僕は小学生になって見知らぬ教室で授業を受けていた。周りは僕のことを知っているようだ。友達と並んで帰ったが誰だか知らない。おまえの家は近くて良いな、と言って角を曲がっていった。ここが僕の家らしい。知らない母さんに挨拶した。未だに知った顔に出会えていない。

腹を空かせた魔法使いが村を訪れた。村人たちは施しの代わりに石礫を彼にくれた。怒った魔法使いは呪いをかけようとして手元が狂い、口から臓物を吹き出して息絶えた。遺体は腐敗してもなお、呪いのせいで土に還ることはなく、村は悪臭の中に閉ざされ、やがて沼地へと変わり果てた。

彼女は僕に傘を差しだした。赤い傘だ。昼過ぎからの豪雨が剥き出しの彼女を穿ち、溶かしてゆく。残った腕を中心にして傘がひらりと反転した。腕付きの傘が傘に成り代わる頃、雨水が湛えられ、雨に叩かれるたびに彼女の残滓が舞い上がる。僕はそれをずっと見続けなくてはならない。

息子とキャッチボールをした。まだ肩が出来上がっていないのか、女投げのようでぎこちない。それでも昔と比べると今やダイレクトで届くのと成長したのだ。そのうちに生意気になって一緒に遊ぶことも無くなるのだろう。少しきつめの球を逸らした息子が笑いながら追いかけてゆく。

もしも明日で世界が滅ぶのなら、そうなる前に旅に出たいな。テニスコートくらいの流水にお気に入りのアンティーク椅子一脚据え置いて、太陽を背中にして波間に漂い流れてゆくんだ。めぎすは極楽鳥の住ま

う南の国。火噴き山のとっぺんの黄金バナナはとてつもなくおいしいらしいよ。

僕のクラスには猿と呼ばれている子がいる。運動が得意で鉄棒では大車輪を何回転も決めるし、風で屋上まで飛ばされた友達の帽子を雨樋を伝って取ってあげたりしているので大人気である。でも、彼が通るたびに動物園に行ったときのような臭いがするので、僕は彼のことが少し苦手です。

手足の細長い真っ黒の男が塀の上を歩いている。まるで酔っ払いのようにおぼつかない足取りで今にも落ちそうなのだが不思議と絶妙のバランスを保っている。その様は踊りのようでもあるので楽しそうだなと僕は思った。上がって男の真似をしてみた。あまり楽しくはない。男に笑われた。

雪原の中程で女は振り向いた。肉感的な体型であったはずだが輪郭が臃気ではっきりしない。紅をひいた唇が動いている。綺麗に並んだ歯の奥から時折見える舌もまた紅い。女は何かを叫んでいるようだが酷い風雪のためにうまく聞き取れない。この心臓を凍てつかせるのは風なのだろうか。

被弾痕だらけの零戦に乗って汚れた燃料を撒き散らしながらレンゲ畑の上を飛ぶ。同乗者の骸骨君とどちらが高笑いであるのか大声勝負。そのあと機体は限界高度まで急上昇。明けの明星が見えたような気がするけど多分間違い。でも骸骨君は泣いていた。急降下中の翼は軋んで飛んでゆく。

両開きの窓から夕暮れの海が見える。まるで金の砂をかき分けるようにしてタンカーがゆっくり進む。男は立ち上がって窓を開けた。外は星々が瞬いている。この部屋は宇宙空間を永遠に彷徨っているのだ。漆黒の闇よりかは幾らかマシなので男は窓を閉めて見飽きた景色を再び見はじめた。

女は悲しみのあまり目頭を強く押さえた。親指が眼球にのめり込む。女は指をどんどん押し込んでゆく。いまや手首のあたりまで眼窩の奥に消えていた。それでも飽きたらず片手も突っ込んで両手で脳髓を掻き回し始めた。そして一気に引き抜くと手の中に暗緑色の悲しみの塊が。スッキリ！

家に帰るとテーブルの上に一通の書き置きを残して妻が突然いなくなっていた。傍らのバスケットにはミカンが山盛りになっている。きのう妻が買ったものだ。これを手に取る時には、もう心が定まっていたのだろうか、それともまだ逡巡していたのだろうか。ミカンの一房を口に入れた。

家に帰ると見知らぬ女が飯を作っていた。出て行くように言ったが「アナタ先にお風呂にしますか」などと言って取り合わない。そこへ「パパお帰り」などと言って見知らぬ子供が抱きついてくる。足下には見知らぬ猫も。こうして見知らぬ者と共同生活が始まったが案外居心地は悪くない。

天上から今年初めての雪がひとひら舞い降りる。少女は両手で受け止めて匂いをかぐ。耳にあてて閑かなる音を聞き取る。今年は村はずれの地蔵横が良いようだ。村人が土を掘り、少女が慎重に雪を落として、そっと土をかぶせた。皆が寝静まったその夜、雪が芽吹いて村中を覆い尽くした。

空からピンク色の雪が降ってきた。訝しんで上空を見上げた人々の皮膚には瘤が生じ、それが裂けて一斉に花が芽吹きだした。赤色や青色、大きいものから小さいのまで、花の種類はその人固有のものであった。人々は自分だけの花を愛でていたが翌日には枯れ果てて全て抜け落ちてしまった。

毎年、施設の僕宛に贈り物が届く。送り主の名は伊達直人。ランドセルから始まり、最後の年の贈り物はマスクだけだった。それをカバンにしまい込んで、新社会人となった僕は明日、ここを出て行く。

アンパンという名で売られていたからといって、中身が本当に餡であるかどうかなんて割ってみないと分からないよ。手違いでカレーが入っているかもしれない。もしそうだとしたらコーラと間違えてめんつゆを飲んでしまったときのように、おどろいて体に悪いよ。ちえっ、粒あんだった。

こし餡派と粒餡派に分かれてのアンパン同士の一大決戦が始まった。戦いは熾烈を極め、両派は次第に傷つき、身体が裂けていった。辺り一面にムツとするような甘い臭いが漂っているのは、飛び散った臓腑のせいである。審判役の貴婦人はカフェ・ラテを片手にクロワッサンを食していた。

「僕の顔をお食べ」しかしいつもと少し様子が違っていた。断面からは餡の代わりにピンク色の脳髓が見えている。「間違えたー」ジャムおじさんが飛んできたけど、もう遅かった。「美味しかったよー」子供たちは血まみれの口を開けてにこやかに笑うのであった。さよならアンパンマン。

今日、我が家の庭に初雪が舞い降りた。梅花の蕾にそっと乗かった。君が生まれた年に植えた木だ。今はもう結構な大きさに育っている。振り返ると、初めて雪を観た時の君が窓の向こうで飛び跳ねて喜んでいる。初雪は直ぐに溶けて消え去り、鮮やかな記憶を連れ去ってしまった。

霧時を過ぎると街なかの気温は氷点下にまで下がった。交差点の信号は点滅へと変わり、街路樹の葉に浮かぶ霜を時折煌めかせている。嫌な音を立てているのは誘導看板の人形だ。誰も見ていないのに腕を振り続けている。溜息がとても白い。俺は夜空に向かってゴジラのように息を吐いた。

列車は動きだし、女は現れた。白いコートに白いブーツ、白銀の髪に青い瞳が印象的だ。客は疎らであるにもかかわらず、女はまるでそこが自分の指定席であるかのように俺の対面に座った。組んだ足が艶めかしい。胸に衝撃を感じて俺は座席に沈み込んだ。女の手には拳銃が握られている。

岩山の頂にて、鬼は月を睨む。月の輪郭は朧となり、溶け出した蜜のように地上へと雫を垂らす。やがてそれは古の姫へと変わる。鬼がかしずき、面を上げた時、姫の姿は霧散した。視線の先には冷たい月が浮かんでいて、己の異相を照らすのみであった。四方の山々に鬼の咆吼が響き渡る。

彼女とコンビニの帰りに空を見上げたらアパートの向こうに満月が見えた。「月が綺麗だし、踊りましょうか？」悪戯っぽく微笑んで、彼女は戯けた様子で変な踊りを始めた。つられて真似したけど、恥ずかしいし、買い物袋には彼女の誕生日ケーキがあるのから、僕のは軽めのステップだ。

寂しい山間を散策していると、不意につまずいて転んでしまった。前のめりの姿勢で手をついたら、ちょうどそこにおぞましくも腐乱死体が……。鼻にくる腐臭と腐肉に沈み込む手の感触は五年たった今でも忘れられるものではなかった。だからいま、監察医をやっている。

飛行船には絶対に乗りたかったのに山高帽の英国紳士に止められた。キザな態度が鼻につく。文句の一つも言ってやろうかと思ったが、黒塗りのスツテッキは痛そうなので我慢した。「スピードが自慢です」飛行船はあっちへ行ったりこっちに来たりで大忙し。今度でいいや、と僕は思った。

僕は電気人間であるので、皆から疎まれ、恐れられたりしている。本当はみんなのことは大好きだし、誰も傷つけない。でも、指先から放射する数万ボルトの電撃を自分の意志では押さえることが出来ないんだ。特に冬場はエネルギーがみなぎって困ってしまう。

夜半に降り積もっていた雪も、お昼頃には殆どが溶けて消えていた。空気も緩んできたので、彼女と外に出た。細い路地には水たまりが出来ていて、シャーベット状に雪が残っている。「さあ、召し上がれ！」彼女のブーツで掻き回されたそれは、たちまちフロズン・コーヒーに早変わり。

目をくり抜かれた咎人らしき男が後ろ手に縛られている。なにかを僕に訴えかけようと身悶えしているのだが、口を麻糸で縫い合わされているため、唸り声にしかない。ついに唇を引き裂いて、男が大口を開けた。そこで夢から覚めた。僕の耳元で声がした。「殺すって言ったんだよ」

広大な砂漠の真ん中に、人々から忘れられた小さな王国があった。遙か昔に交易は絶え、作物も実ることはないが、ある秘密のために滅びることを免れていた。近くには蜃気楼の森があり、三歳の子供だけが果実を採ることが出来るのだ。大人達は日差しを避け、子らの帰りを待つのである。

電車の外を眺めている。駅を通過するたびにホームでは、母と手を繋いで幼稚園に通う僕、初めての彼女と映画を観る僕、上司に叱られている僕、息子を抱き上げている僕、がいた。終点駅では僕の代わりに黒い人がいる。うっすら目を開けると、遠くから救急車のサイレンが近づいてきた。

映画の上映中、「もうすぐ、あの男は銃で殺されるよ」などと、隣の女のネタバレが止まらない。次第に興奮してきた様子で、ついには立ち上がり「もう、面倒くさい！ おまえは心臓発作だっ！」と絶叫し出した。ゆびを指された観客は座席から崩れ落ちた。「次は……」女と目が合った。

春から中堅企業に勤めだした。今の処お茶汲みが主な仕事だ。今日も給湯室にはあいつが居る。流し台にぴったりと収まるような巨大な蛙だ。この社の主であるらしい。排水口を塞いでいるので、体を持ち上げなければ水が流せない。手でまさぐると、ぐふふと嫌な声で鳴くので気持ち悪い。

珈琲豆は南の暑い国からやって来る。摘むのは乙女と決まっている。麻袋一杯になると赤銅色の男達が担ぎ出す。農園主の鞭は容赦ない。険しい道を通り、港に着く頃には男達の血と汗を吸って麻袋は濡れそぼつ。船が赤道を越える頃、体液と混ざった豆は発酵する。珈琲が薫り高い所以だ。

霧を裂いて幽霊船は現れる。浜の漁民は松明を手にして追い返そうとする。叫ぶ者、転がって砂まみれの者、ただ念仏をとる者。中には乗り込もうとする幼子もいる。父親を亡くした子だ。泣きながら、女が手を引く。やがて霧が晴れると共に、波の音だけの残して幽霊船は消え去った。

辺境の異国を旅行中、くしゃみをした罪で捕まって、元サーカステントの法廷に連れられた。通訳は鼻をほじるのに忙しい。気になるのは僕の片手に掛けられた手錠の先だ。5 m程長い鎖で、カーテンの向こうの誰かと繋がっているようだ。手錠に伝わる振動と喘ぎ声で裁判に集中出来ない。

仕事帰りの女がコンビニで美少年卵を買って帰った。カップに卵を入れ、人肌のお湯を注いで暫く待つと、殻を破って美少年が現れる。ひとしきり会話を楽しんだが、卵は一時間しか保たない。どろりとしたカップの中身をトイレに流した後、女はシャワーを浴びながら、明日の卵を考える。

ある時、暇な神が豆を人々にぶつけ始めた。人間の中でも賢い者達はこの痛みに耐えて動かなかった。一方、愚かな者達は痛みで泣き叫び、転げ回った。悦んだ神が益々攻撃の度を強めたので、愚かな者達は辺境の地へと逃げのびた。そこは鬼の住もう地と呼ばれ、のちに科学が発達した。

場末のバーで女と仲良くなり、部屋に誘われた。安アパートの階段は鋼板で出来ており、先に行く女のヒールがカンカン響いている。ふと見ると階段の隙間の間に赤子が浮かんで見えた。「それは悪さしないよ～」振り向きもせずに言うと、女は行ってしまった。降りるのも、昇るのも怖い。

電線のスズメを眺めながら公園のベンチで休憩していると、いつのまにか隣に初老の男が座っていた。男が「右の鳥」と呟いた途端、右のスズメが石のようにボトリと落ちて動かなくなった。驚いて顔を向けたが男は煙のように消え去っていた。うしろから「前の人間」と言う声が聞こえた。

ここ山間の小学校では鶏が生活に欠かせない。通学路が荒地であるため、鶏に乗らなければ登校が困難なのである。いじめっ子の鶏はトサカを突いてくるので嫌われている。貧乏人のは、そもそもが食材だ。僕のは毛づやの良い自慢の鶏だけど、デブが狙っているので片時も目が離せない。

病床の母のため、万病に効く龍の目玉を手に入れるべく、男は幽谷へ赴いた。おりよく就寝中の龍に飛び乗ったが、これを振り落とさんと暴れられ、しがみついただけで精一杯であった。七日七晩の後、根負けした龍から目玉を手に入れることが出来たが、村ではもう七百年も時が経っていた。

脂肪吸引の手術を受けた。最新式では部分麻酔と安楽薬の投与だけであるらしい。薬のおかげで緊張もほぐれ、楽しい気分だ。透明のホルダーには脂肪が次々に溜まっていく。ん？ 肉片も混じってる。先生の手元が狂ってるのかな、アハハ。あ～あ、小腸がとぐろを巻いてやがる、アハハ。

お腹に出来た腫瘍の除去手術を受けた。部分麻酔で良いらしい。カーテンで仕切られた向こう側は見えないが、ときおり、先生と看護師の悲鳴が聞こえてくる。台の上に、髪の毛のある眼球、老婆の右手、ブリキのロボット、豚の生首、などが次々と並べられてゆく。いったい、なんなのだ。

その砂漠の村には豊かなオアシスがあったが、妖術師の呪いを受けて枯れてしまった。乾ききった村人達が水を得る唯一の方法は、妖術師が建てた一柱の魔神像にあった。日没後には像の股間より僅かばかりの水分が染み出てくるのである。暗い夜には、聖者も貧者も我先にと像に群がる。

部屋を掃除していたらテレビの後ろにカツラが落ちているのに気がついた。家人で使用者は居ないので、

不思議に思い、拾おうとしたときに誤って掃除機のノズルで吸い込んでしまった。とたんに女の悲鳴が沸き上がり、排気口からは腐ったような臭いが吐き出された。掃除機ごと、捨てた。

我が家では夕飯時に皆、陰鬱な気分になる。どこからか、市松人形が現れて、食卓の一角に居座るからである。家族の食事が終わると、またどこかへ消えるので実害はない。「アレの食事も用意すれば？」と母に言ったことがあったが「家族になるからダメっ！」と目を釣り上げて叱られた。

「アレはどうなったかな」「時間が経ったからアレも土に還ったんじゃないかしら」「しかしアレもかなり手こずったな」「ふふふ、あなたアレに首を絞められていたものね」「ははは、お前こそアレの悲鳴で鼓膜をやられたじゃないか」父さんも母さんも、アレが何なのか教えてくれない。

昼過ぎからの陽光を浴びて積雪も溶け始めている。駅からの帰り道、手を繋いでいた彼女が悲鳴をあげた。電線に残っていた雪が首筋から背中に入ったらしい。ちょっとした偶然と小さな不幸を笑い合いながらマンションの扉を閉めた。一瞬の暗闇、彼女の背を伝う雪の残滓が脳裏に浮かぶ。

ここは塔の村だ。砂漠の真ん中に建っている。構造は巨大な煙突を想像してみると良い。内壁に沿うようにして螺旋状に階段が拵えてあり、一段毎が一人分の居住スペースとなっている。吹き抜け構造の遙か上方から、今日は三遺体が降ってきた。今から三つ分上に移動しなければならない。

今日はおかしい。モテ男でもない僕にクラス的女子が次々とチョコを渡してくる。生徒会長のニックネームを持つ女子を問い詰めると、悪戯でこのゲームを開催したことを告白した。怒った僕に、涙目になった彼女がこう言った。「ごめん、こうでもしなきゃ、恥ずかしくて渡せなかったの」

「お前は煮干しだ」新人研修長に告げられた。意味が分からない。他の新人はコピー取り等、分かりやすい役割なのに。仕方ないので、それから毎日煮干しの事だけを考えた。そのおかげか、アイデアが次々に湧いて、CMプランナーとして出世した。社長になった今でも意味は分からない。

俯き加減に歩いている女性と雪道で擦れ違った。涙ぐんでいるようだった。道端には小さな雪達磨があり、その傍らで蜜柑を持った幼子が、女性の後ろ姿を見送っていた。よく見てみると雪達磨は地蔵であった。線香の匂いがしたかと思うと、幼子の姿は消え去り、蜜柑がひとつ、転がった。

♪ぱあ～ぷう～ 町の夕暮れ時に、黒豹に乗った豆腐売りはやって来る。豆腐の美味さとオジサンの達者なお喋りで、主婦に人気だ。今も芸能ネタで話が盛り上がっている。黒豹は微動だにせず、筋肉を隆起させたままで格好いい。でも、豆腐のしずくで後ろ足がびしゃびしゃなのが切ない。

なぜか二十年程も遡って五歳くらいになった私は、母とシーソーを楽しんでいる。行ったり来たりを繰り返していたが、あるときから私の方が下がったきりで上がらなくなった。母は私に手を振りながら風船のようにゆっくりと空を昇ってゆく。そこで、目が覚めた。電話が鳴り続けている。

静かな月の夜、キャラバンでは、男を置き去りにすることが決まった。隊列の速度に付いてこれない者は切り捨てる、それが砂漠での掟なのだ。顔に浮かぶ疱瘡をフードで隠し、男は隊長の言葉に肯いた。やが

て、キャラバンが砂丘の向こうに消えゆく。男は寝転んだ。月の大きな夜だった。

戯れに十枚のコインを投げてみたら奇跡的に全てが立った状態で静止した。そのせいで変なのが現れた。「私はコインの魔神だ。汝の願いを言え」必死で考えたが良い案が浮かばない。そのうちに魔神は消えてしまった。一枚のコインが倒れてしまったのだ。再び投げたが未だに成功しない。

何百年も前から打ち捨てられたままの教会が村はずれにあった。その周囲には柵が密生しているので、人も動物でさえも近づくことはなかった。にもかかわらず、ときおり、割れ鐘が鳴り響くことがある。良くないことが起きる前兆だ。村人は戸を堅く閉ざして、震える夜を過ごすのである。

なぜそんな事をしたのか自分でも分からない。バーには寄ったが泥酔していたわけでもない。何か捨て鉢な気分がそうさせたのだろう。俺は公園の女子トイレに忍び込んだ。鍵を閉めて床に座ると何かの拍子に音消しが鳴った。もう嗚咽を抑えきれなかった。俺はセンサーを作動させ続ける。

帰宅していると異様なメロディーと共にパンダバスが目の前に止まった。運転手は猿の着ぐるみだ。乗客も豚や犬の着ぐるみだ。それが規則なのだろう。僕は〇〇を選んだ。途端に車内から抗議の怒声が沸き上がった。追い出された僕はバスを見送りながら正解は何であったかを考えている。

アオタン会とは、体に青あざを持つ子供の集まりの事である。誰が名付けたわけでもなく、自然とそんな名前になった。別段、何かするという事はない。慰めもしない。話はしない。ただ一緒になって夕日を見つめるだけである。月日が経つにつれ、一人、二人と会員は欠けていつている。

「忘れないで」そう言うと、病床の妻は髪を抜いて私の薬指に結び、それきり息をしなくなった。葬儀が済む頃には結わえていた髪も無くなっていた。あれから五年、再婚することになり、彼女の墓前で手を合わせた。ふと手を広げると一本の白い髪が落ちる。人の想いも年を経るのだろう。

リサイクルショップに立ち寄ると猫足のかわいい鏡台が目についた。ワケアリと書いてある。部屋に設置してみると確かに抽斗が無い。「また、無駄買いね」そう言った妻は鏡台に手を掛け、するりと入った。妻は抽斗になった。それきり返事もしなくなったので、今日の紅茶は僕の役目だ。

泥まみれの手が地面から生えている。掴みたくて、縋り付きたくて、しかし叶わなかった思いの形象だ。それはやがて萎びて花となり、種をなす。きょうの空は深くて青い。幾万もの綿毛が流れてゆく。

ノックの音がした。部屋の扉を開けたが誰もいない。あたりを見回しても扉はもう無い。再びノックの音がする。音のする場所は私の頭であるらしい。どうぞ、と言ったら、おでこに赤い線が走り、切れ目に沿って押し扉が開いた。なんだ扉はあるじゃないか。中から何が出てくるのだろうか？

夜更けに小川沿いの道を歩いていると街灯の下に女がいるのが見えてきた。頭が低い位置にあるので足を向こうにして座っているのだろう。横を過ぎるときに懐かしいコンバースの星マークがちらりと見えた。

あれからもう百メートルは歩いている。それなのにバッシュがまだ足下に見える。

出勤の時、小さな川の岸辺に小熊のぬいぐるみが引っかかっているのが目に付いた。クレーンゲームの景品みたいだった。獲れたものの、気に入らなくて捨てたのだろう。電車の窓から空を眺めると雷が光り、大粒の雨がガラスを叩いた。人波に押されながら、あの熊の流れゆく先を思った。

駅前を流れる川はネズミの死体が流れ、いつも悪臭を漂わせているようなどぶ川であったが、再開発のおかげで今ではきれいに護岸され、水も清いものとなった。その川で今一匹の鯉が跳ねた。ドボンと音がした。空気が振動して、一瞬だけ、街灯の下に寂しげな男の姿を浮かび上がらせた。

蚊取り線香の匂いを嗅ぎながら風鈴の音を数えていると喧しい蝉に邪魔されることなく昼下がりのまどろみを愉しむことが出来る。玄関に人の気配がしたが、まぶたが重い。声なき主が廊下を渡り、枕元に座った気がした。団扇のおおぐ風に母の匂いが混ざっている。精霊馬は見ただろうか。

子供と手を繋いで夜の土手を歩いていると、空に浮かんだ列車が目の前を横切っていった。とっさにきつく手を握ったのに、よく見ると手には数本の藁が有るのみで、子供は列車の窓から私を見下ろしている。必死で追いかけたけど、つまずいて転んだあとに見上げると、もう何も無かった。

笑う男がいた。あんまり堂々と大きな声で笑うものだから、いらいらして、笑う男を殴った。笑う男は転がりながらも相変わらず大きな声で笑い続けていた。蹴っ飛ばしてもトンカチで殴りつけても突いたりしても変わらない。しまいにはつられて僕も大きな声で笑った。笑う男に殴られた。

小舟は睡蓮の葉をかき分けて、昼下がりの陽に温められた古池をすべるように進んでいく。早朝の雨が水滴となって葉の上で煌めいている。舳先の蜘蛛は落ちて、たちまちあらわれた水底の鯉に吞まれてしまった。水面を叩く尾が波紋を作り、葉を揺らした。花も笑うようにゆっくり揺れた。

「昔は恋の願い事もしたそうですよ」花火工場で担当者は語る。ふいに忘れたはずの五年前の憎しみが湧き上がって資料を持つ手に力が入る。指先にヌルリとした感触がして、見てみると血が流れていた。気付かれないように五尺玉になすりつけてみる。どんな色で咲くのかなと私は思った。

暗い暗い道を酔っ払ってふらふらと俺は歩く。向こうから来た似たような男と行き違う。振り返ると男は地面に倒れていた。もう死んでいた。懐の財布には千円札一枚と子供の写真が入っていた。自販機のボタンを押すと妙に大きな音がした。夜明けまで、ずっと俺は橋の上から河を眺めていた。

列車に揺られていると、いつのまにか対面にスーツを着た初老の男とサンダル履きで腹の出た中年女が座っていた。胸元にジェニーと書かれた名札が付いている。しばらくして見知らぬ駅で、男と、おぼつかない足取りの女は降りていった。男の手にはリモコンのようなものが握られていた。

犬は黍団子を呉れという。大事な黍団子だ。おいそれとは遣る訳にはゆかぬ。だが意気地がないように思われるのも癪なので一つ呉れて遣った。そうして猿が来る、雉も来た。犬と同じように分け与えると残りは僅かとなった。俺は騙されているような気になった。 #ももたろう文体模写

ついのべのつどい

<http://p.booklog.jp/book/82625>

著者 : oaken

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/oaken/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/82625>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/82625>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ